

〈Session 3〉 金沢・石川における自然と文化

Nature and Culture in Kanazawa and Ishikawa

研究発表5 「地域再活性化の機会：障害を持つ人々のケアを通して学んだ教訓」

Mammadova Aida（金沢大学 特任助教）

本日は英語でプレゼンテーションをしたいと思います。実は、私は医学の博士号を持っていますが、今は学生のために環境学習を教えています。私の主な仕事は、教育現場の仕事を発展させ、地域の問題だけでなく地球規模の問題についても意識を高めることです。

1. 生物・文化保護のための教育現場

これまで自然や文化活動に関連するいくつかの講義を行ってきましたが、私は生物文化活動のようにそれらを組み合わせました。また、コミュニティベースの学習と場所別の学習、創造的な観光を行っています。ここでは書いていませんが、私たちはまた、再生可能エネルギー、廃棄物管理、水管理、学生の教育現場作業に関連する持続可能なコースを作りました。

自然や文化活動では、私は主に人体の五感を使用しています。私たちはどのように自然を認識し、その認識をどのように文化の創造に利用できるのでしょうか。コミュニティベースの学習は、生徒が主に日常生活の中で地域の人々を支援するボランティア活動でした。場所特有の学習、私たちは主にその地域

- ・自然と文化に関わるアクティビティ
- ・コミュニティベースの学習
- ・地域に特化した学習
- ・独創的でエコなツアリズム



図 56：生物文化保護の教育

に関連した科目であることを重視しました。たとえば、この写真（図 56）では、日本の和紙である二俣和紙を見ることができます。この論文を作成する際には、その地域に行って人々がどのように植物を植えているのかを見てから、後に彼らが和紙を作りました。このようにして場所特有の学習と呼ばれる必要があります。創造的なエコツーリズムの場所では、学生自身が観光客になり、彼らが訪れたいフィールドと地域や街の中でどのようなものを見たいのかを見つけなければなりません。

しかし、私は学生が観光や経済的な場所に関係のない何か新しいことを体験するための革新を与えたいと思っていました。そこで私は福祉に関するコースを作ることにしました。生徒のための福祉と農業を通して学ぶことは、わずか数ヶ月前に作成された新しいア

アプローチでした。それは私たちに非常に有益な結果をもたらし、学生は地域の問題や社会問題に深く関わっていくようになりました。

たとえば、皆さまのうち何人がコミュニケーションを経験していますでしょうか、あるいは皆さまの周囲に障害のある人がいますでしょうか？彼らと話をしたことがありますか？あなたの家族や職場の中に身体障害のある人や身体障害のある人がいますか？彼らとコンタクトを取る方法や会話の仕方をご存知でしょうか？世界中の人口の15%が障害のある人です。障害は実際には制限されるものではないので、私たちは社会での役割を重視し、無視してはいけません。障害とは、人に対する差別です。それは社会の平等を不均衡にします。それは私たちの差別です。

現在ヨーロッパやアメリカでは、保護された農場は非常に広範な活動であり、障害を持つ人々が農場に来てそこで働くことができます。保護された農場は、精神的、精神医学的、心理的、身体的障害を持つ人々が来てそこで働くための条件だけでなく、感情的、行動的および学業的困難を有する子ども、話すことができない子ども、または学校で教育に従うことができない子どものためでもあります。また、麻薬の使用歴があつたり中毒歴があつたりする若者、長期の失業者、保護された農場に来て彼らが働き始めるなどの人々もいます。

科学的研究は、自然なリズムと農業生活、肉体的作業によって、人間に癒しの効果をもたらされることを証明しています。いくつかの研究では、動物や樹木のコミュニケーションで五感を使って自然と対話すると、コミュニケーション障害のある子供たちの心がより創造的になり、彼らは異なった考え方をし、人々と少しずつコミュニケーションをとる方法を学び始めることを示しています。

2. 金沢における農業+福祉農場

私の研究は、私がここで見つけることができる金沢に関するものでした。金沢に保護された農場があるかどうか、学生にフィールドワークを提供することはできるかどうか、私は本当に多くを探しました。障害を持つ人々を農場に連れて行った病院は数多くありましたが、地域の活性化には何の影響もありませんし、作物を植える土地を与えているだけです。私は地域の問題に関連した新しいものを探したかったのです。私はインターネットと多くの場所で検索しました。そして私は2つしか見つかりませんでした。1つはインターネット検索だけで見つけた「金沢ちはらファーム」、2つ目は「REHAS FARM」です。UNU-IAS OUIKの永井さんがこの活動に携わっている人に私を紹介してくれました。ですから、金沢にはあまりたくさんありませんが、私が見つけた2つの農場について、その違いをご紹介します。

最初の農場の名前は「金沢ちはらファーム」です。それは私有の農場で、ビジネスマンが所有しています。彼は10の業種を持ち、「金沢ちはらファーム」もその一つです。彼は自分の息子のために活動を始めました。彼の子どもはアスペルガーだったのです。彼はコミュニケーションを図ることに障害を抱えていたので、彼は子どものために何かを作ることにしました。そして農業を始めました。実際には、彼は農業の経験がありません。



図 57 : 金沢ちはらファーム

専門的には、製薬会社を経営する薬剤師であり、医療用の医薬品を生産しています。彼は農場を作ろうと決心し、金沢市の土地を提供するように金沢市に依頼しました。しかし、金沢市は資格がないと言って拒否しました。彼は多大な苦労をしましたが、ついに金沢市にある湯涌の近くにある放棄された豊かな土地を手に入れました。彼はその土地を手に入れ、3つの主要なプロジェクトを開始しました。まず、障害者のための雇用を提供することです。彼は実際に働く障害者のために時給を払っています。2番目は野菜を究極の補助食品として作っています。彼は有機栽培、無農薬で、食糧のためのハーブを生産しています。最後は地域活性化です。彼は放棄された農地に多くの人々を引き寄せ、自分の土地を増やしたいと考えています。

これは実際に彼が持っているブルーベリー畑です（図 58）。これらのブルーベリーはすべてオーガニックであり、アスペルガーの子どもたちはこれをすべて掃除しています。有機的な生産をしていると、多くの虫や昆虫が植物に生息するので、すべて手作業で掃除します。ブルーベリーは非常に大きく、非常においしく、彼はマーケットの外でそれを販売しています。また、彼はこれを生産しました。それはムラサキと呼ばれています。作るのが非常に難しい薬草です。



図 58 : ブルーベリー畑

2番目の農場は「REHAS FARM」です。これは実際には Creators Inc. Company に所属するリハビリファームです。彼らは障害者のための雇用を提供し、4つの柱で事業機会を創出する。一つはデザインと創造性です。二番目は清掃、清掃は障害者が金沢市を清掃して街

を清掃していることを意味します。金沢大学では、トイレや床の清掃はすべて障害者が行っているため、きれいな金沢市を支えています。第三、第四は食料と農業ですが、これらの人々は専門の作業療法士と協力しています。

能登半島でとれるヒバから作られたこれら(図 60)の種類のカードを作成し、障害者のためにいくつかの仕事を提供しています。そのため、このカードはとても非常に良い影響を持ち、いいにおい/香りがするのです。次はハーブ栽培です。「ハーブ農園ペザン」という河北潟にある大きな農場にハーブを植えています。ハーブ栽培やパッケージングも、すべて障害者によって行われています。



図 59 : REHAS FARM



図 60 : ヒバで作られたカード

3. 結論

障害者や主催者とのコミュニケーションの後に、私たちは学生たちと結果をまとめました。私たちはいくつかの結果を見出しました。大きな農業景観は人々の健康を回復するのに役立ちます。それは知られている事実です。もう一つは、障害者の社会内への統合です。3番目は、障害者の独立性と平等な社会的地位でした。彼らは社会から離れて見えませんが、社会に関わっています。もう一つの機会は、農産物の多様化でした。キュウリや

トマトなどを植えているだけでなく、多様化することができ、日本の様々なハーブを外部から持ち込むことができます。それは地元のハーブではありません。ラベンダー、バジル、ミント、その他のハーブを植えるので、製品も多様化しています。

また、障害としての欠点は主なものではありません。実際、障害は利点として使用することができます。それは制限ではありません。それは利点です。たとえば、例えば、小さなハーブを箱に入れたり、何らかの種類のパッケージで梱包したい時、葉が落ちたりした際には私たちはそれらを無視してしまうかもしれません。「落ちちゃったけどいいか。」

と。しかし、障害のある人はそれを受け取り、すべてを選んでパッケージに入れます。彼らは仕事でとても真面目です。彼らは何も無駄にしません。もちろん、どのように働くべきかを教えることは最も難しいことですが、その方法を教えられたら、あなたはそれらをたくさん信頼することができます。彼らはいそをつくことはなく、とても正直です。私たちの社会では、私たちは嘘をついていますが、身体障害者は嘘をつきません。彼らはいつもととても率直で、どんな質問にも答えたいと思っています。また、障害者を雇用する場合、1時間あたり120円の費用となるため、雇用は新しい収入源をもたらします。健常の人を雇うという意味では950円なので、普通の人を雇うよりも80-90%安く、地域の経済を向上させることができます。

私たちが最終的に学生とまとめたのは、特にこれを強調したいのですが、それは里山の地域レクリエーションにとって大きな可能性です。里山には、高齢化、人口減少、人材不足など、多くの問題があります。実際には、これらの障害者は巨大な労働資源を持ち、里山問題の活性化と活性化に役立ちます。

SDGsとして、学生が主に集中していたのは8番目の目標でした。若者や障害者を含むすべての女性と男性の完全かつ生産的な雇用と適切な仕事を達成するために、目標8.5に下線が引かれています。SDGsでは障害の言及はありません。障害の目標はありませんが、経済成長のセクター8では言及されているので、それについて考えるべきです。彼らは地元経済に多大な貢献をしています。

私たちは皆生物多様性について語ります。生物多様性は、強い生態系の本質です。文化多様性、それは強いアイデンティティを創造します。しかし、人々の多様性があることを理解する必要があります。私たちの社会には多くの差別があります。しかし、人間の多様性が、強い社会を創造するために多くの利益をもたらし、もたらすことができることを理解する必要があります。したがって、私たちはそれを無視して、すべての人に平等な権利を行使すべきなのです。どうもありがとうございました。

招待講演 3

「金沢・能登に観るエコロジカル・デモクラシー」

土肥 真人（東京工業大学 准教授）

こんにちは。エコロジカル・デモクラシー財団の代表理事、東工大で教員をしています土肥と申します。今日はよろしく申し上げます。今回は、金沢大学主催の「暮らしと自然と文化的景観」に呼んでいただいて、しかもエコロジカル・デモクラシーで全体をコーディネーターとしてもいいという、非常に貴重な機会を頂きました。エコデモ財団は僕たちが去年設立しました。エコロジカル・デモクラシーというのは、もうちょっと長い歴史があるのですが、日本で大々的にやるのはほぼ初めてと言ってもいいのです。ドキドキしながら金沢にやって来て、今もドキドキしていますけれども、日本で初めてのエコデモの挑戦ができたこと、そして僕としては非常にうまくいったと思いますので、その話を聞いてください。

今日は、このようなお話をしてみたいと思います。最初に自己紹介ですが、エコロジカル・デモクラシー的にやってみますね。皆さんにもぜひ、エコデモ的自己紹介を考えていただきたいのです。次に、エコロジカル・デモクラシーの説明をして、それから昨日、一昨日と、能登と金沢で皆さんと行ったエコロジカル・デモクラシーの発見の結果をご紹介しますと思います。最後に、それをどのように読むのかを提示してみたいと思います。

1. 自己紹介：エコデモ名刺

さて、これ（図 61）は僕の名刺です。上の方に、コミュニティデザイナーとランドスケープアーキテクトという、僕の専門職能が書いてあります。下に、どこの社会的な組織にいるかが書いてありまして、ポジションも書いてあります。これは、社会の中で、どのようなポジションにいるかという、いわゆる普通の名刺、ビジネスカードです。



図 61：ビジネスカード

このビジネスカードに対して、私たちはエコデモ名刺（図 62）というものを作っていて、表がエコロジー・サイドです。自分がどの川の近くに住んでいるかを示しています。人は誰でも、近隣に流れる川の水を飲んでいきます。引っ越せば自分が所属する川が変わっていく、そのような感じです。裏面はデモクラシーサイドで、自分の住むまちの都市宣言や市民憲章

から、が選んだ一節が載せてあります。多くの方は知らないと思うのですが、後で紹介しますが、金沢にも都市宣言、いっぱいあるのですよ。そういう市民としての自分の位置を示す名刺です。このエコデモ名刺ですと、会社にはない人も、赤ちゃんでも・・・赤ちゃんは憲章を選べないか。社会的位置を示す名刺を持たない方も、誰でも名刺を持てるということになります。



図 62 : エコデモ名刺 1

エコロジーサイドは、分水嶺によるバイオリージョンの考え方に基づいています。海から水が蒸発して、雲になって、山に当たって、雨になって落ちる。それで表面流は川になって、地下水は伏流し、いろいろなところで吹き出したりする。そのような大きな水の循環が陸にもあり、その中のどこかに僕たちはいます。山に降った水が、川になり、海に流れていく中の一部。皆さん、水を飲んで出します。レタスなどの野菜、動物でもいいですが、それらを食べると、その水分が僕たちの体の中に入って、そして出ていきます。これは大きな水の循環の一部で、ごく一部だけれども、どんなに近代的な生活をしていても、私たちは水の循環の中にいます。そうでない人はいないわけです。僕は時々イタリアの水を買って飲んだりしているので、環境を攪乱してしまっていますが、それでも水の循環の中にいます。

この図 (図 63) は、僕の名刺を多摩川の流域に合わせてみたものです。多摩川の流域には、非常に多くの人々が住んでいます。僕はここに降った雨の水を飲んでいる多くの人の一人なのです。厳密に言うと、東京の水道水は、上水道に荒川の水がだいぶ混ざるので、純粋な多摩川の水ではないのではないかと思います。それでもそういう自然の摂理の中に、私たちもいます。



図 63 : エコデモ名刺と流域 1

さて、これ (図 64) は僕が選んだ自分のまちの市民憲章です。世田谷区には、平和都市宣言、子ども・子育て応援都市宣言、健康都市宣言等々があります。世田谷区風景づくり条例なども有名です。私はこの中から、平和都市宣言の中の冒頭の、「核兵器のない、戦争のない

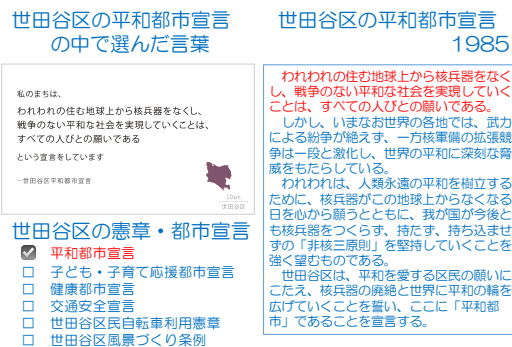


図 64 : 世田谷区の市民憲章

平和を実現していく」という一節を、自分のエコデモ名刺に入れました。僕はこれを読んで、世田谷区民であることを誇りに思うのです。市民社会の中での自分の位置を人に示す、こういうことがデモクラシーの主体の自分であり、市民としての位置を示す、そういう名刺です。

こちら(図 65)は勝手に作ってみた、丸谷先生のエコデモ名刺です。本人の了解を得ていないのですけれども、住所は知っているので勝手にやってみました。丸谷先生は、金沢に引っ越して来られて2、3年ですか？まだ1年ちょっとですか。大野川からさかのぼって、浅野川の流域に住んでいらっしゃいます。水の循環は多摩川に比べると、非常に早いです。山に降った雨水が海にすぐ流れていきます。金沢市にはたくさん都市宣言があるのですけれども、丸谷さんなら必ずこれを選ぶであろうという、「世界工芸都市宣言」から一節を選んでみました。エコデモ名刺は100枚3000円で売っているのですが、なかなか売れません(笑)。

エコデモ名刺を地図に重ねてみると、このように(図 66)なります。このように雄大なランドスケープの上を水が潤沢に流れていて、その一部に皆さんがおられるということです。変な話ですが、サケは鼻がいいので、自分の川の匂いをたよりに帰ってくるといわれています。先ほど、Kennethさんのスライドにもサケがいましたが、今、皆さんも僕もサケだとすると、僕の匂いと、皆さんの多く、金沢の方の匂いは、多分違うのです。そのくらい、水が自分たちの

体を構成しているわけです。ちなみにサケの研究者から聞いたのですが、アメリカのサケも、日本のサケも、子どもの頃は同じベーリング海の辺にいたのだけど、決して大陸は間違えないそうです。ただ帰るべき川は、実は10%から20%ほど、間違えているらしいです。

丸谷先生のために僕が選んだ工芸都市宣言には、「私たちのまち金沢は、香り高い伝統文化と四季折々の美しい自然の中で、多くの名工を輩出し、世界に誇る幾多の手技による名品を生み出すとともに、市民生活の中に格調高い技と美に対する豊かな感性をはぐくんできた」とあります。これは昨日、私たちが金沢の街中のクリエイティブツアーで聞いた言葉、そのままです。金沢というのはそういうまちだから、アートが非常にやりやすい場所だとお

私のおまは、香り高い伝統文化と四季折々の美しい自然の中で、多くの名工を輩出し、世界に誇る幾多の手技による名品を生み出すとともに、市民生活の中に格調高い技と美に対する豊かな感性をはぐくんできた。という宣言をしています。-世界工芸都市宣言

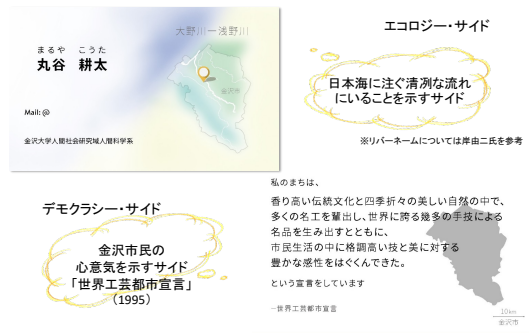


図 65 : エコデモ名刺 2



図 66 : エコデモ名刺と流域 2

っしやっていました。

ちなみに調べてみると、能登と金沢のあたりでは、これぐらい(図 67) たくさんの宣言・憲章があるそうです。町によっては、市民憲章などを調べるのはすごく大変です。いろいろなところに散らかっていて、議員さんも知らなかったりするくらいです。でも金沢市は、きちんと市のホームページにまとめて書いてあるので、やはり大変誇り高い町なのだということが、こういうことから分かります。

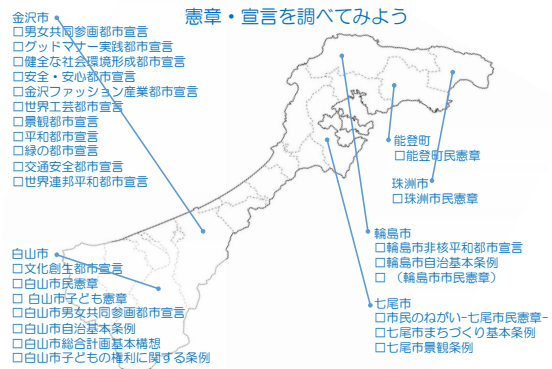


図 67 : 金沢・能登の宣言・憲章

このスライド(図 67)に都市憲章を並べてみました。皆さんもぜひ、見てみてくださいね。

2. エコロジカル・デモクラシーとは?

さて、そのようなわけで、皆さんもエコデモ名刺を、潜在的には持っていらっしゃるわけです。エコロジカル・デモクラシーというのを、私たちは社会的な存在であり、自然の存在でもあると説明したわけですが、これは僕が考えたというよりも、Randolph Hester さんの『Design for Ecological Democracy』という本があって、そこに書いてあることです。これはすごく厚い本で、500 ページぐらいあります。なんとか翻訳して、2018 年 4 月に鹿島出版会から刊行されます。「鋭意作業中」と書いてありますが、翻訳は全部終わっていますので、出版されたらぜひ手に取ってくださいね。本当に面白い本で、僕が今から話すようなことは、大体、この中に書いてあるような感じです。僕たちは日本でも、自然と社会の連動を進めるために、昨年エコデモ財団を設立しました。

エコデモを説明するいろいろな言葉を探してきました。エコロジーとデモクラシーを一緒に考えることは、なかなか難しいのです。しかも、エコロジカルは修飾語で、デモクラシーが主なのです。自然と社会の両方を、その場所に根付くように一生懸命考えること。それから、それを組み合わせてみる。そして行動し、事態を動かして、世界を構成し直す。自分の周りの世界もだけれども、世界中、文字どおり地球という意味でも、自然と社会の関係を再構成します。そのような、いろいろなところにある活動。そこで実践されている方法。生み出されている価値。それを支える根拠、思想というものを、全部エコロジカル・デモクラシーと呼びます。

これでは少し分りにくいということで、いろいろ考えたのですが、最近一番伝わるなっと思う言葉がこれです。「自然を直そうとすると、同時に社会が治る。社会を直そうとする

と、自然が治る。」そういうことが結構あって、それこそが、エコロジカル・デモクラシーの現物というのでしょうか。エコデモの現物がそこいら中にあるということなのです。

先ほど Aida さんが、農福連携の話をしていましたが、あれはまったくその一例です。障害者のための政策をやろうとしたら、実は農業政策として、救世主になりつつあります。農業を本当に農業なしでやろうと思ったら、とんでもなく手間が掛かりますよね。それを、障害者の人たちはやってくさる。社会と自然の連動のととても良い例だと思います。

例えば間伐をしなければいけない森に入るときに市民参加でやる。そうすると、市民の人たちは森のサイクルを知り、生物を知り、水の循環を知り、林業も知るようになります。そういう勉強をします。それから、一緒に活動すると友達もでき、交流が始まるかもしれません。こういうことが起こります。見る目さえあれば、こういうことはそこら中であって、そして非常に重要なことだというのが、エコロジカル・デモクラシーの考え方です。

これは最近特に思うことなのですが、民主主義が非常に危ないところにあるのではないかと。でも民主主義はかけがえのない制度であって、一人一人の自由を保障できる、唯一の政治体制なのです。だけど同時に行き過ぎて無制限の自由ということになると、孤立やエゴ、無責任ということを引き起こします。そして現在は、まさにそんな事態だと思うのです。

それに対して、先ほどのエコデモ名刺のように、僕たちは自然の一部であり、社会の一部であることを知る事で、対抗できるのではないかと。現代人は、自然やコミュニティからあたかも離脱したように生きているけれども、そんなことはあり得ません。私たちはどこかの水を飲み、どこかの町に住んでいます。隣の人と支え合って生きています。これを知り暮らしに組み込むことが、もう一度、個人の責任ある自由をさらに進め、喜びを増し、社会と自然を持続可能にするために必要だと、エコデモは教えてくれます。現在のデモクラシーをエコロジカル・デモクラシーに取り替えるという、そのようなイメージです。

こんなことを言うと、そんなことは、なかなかできないのではないかと、新しい民主主義をつくるなどと、無理だろうと思われませんか。しかし、もう一つ、すごく楽しい秘密があって、見る目を持ってみると、どこでもかしこでもエコデモが見えるということです。エコデモって楽しいんですね。一昨日、昨日と、いろいろなところを見せてもらいましたが、全部エコデモですし、今日の皆さんのプレゼンテーションも、僕から見ると、こんなにすごいエコデモがあるのかと見えますし、エコデモは、ここでも、そこでも、どこでも、どこにでも、いつでも、誰でも、なんだと思っています。その例を、今から、お話ししてみたいと思います。

エコデモ財団が取り組んでいる 10 の事業のステップ図を資料にするためにスライドに入れましたが、時間が足りないのでスキップします。パンフレットの中にも書いてありますので、ぜひ見て下さい。

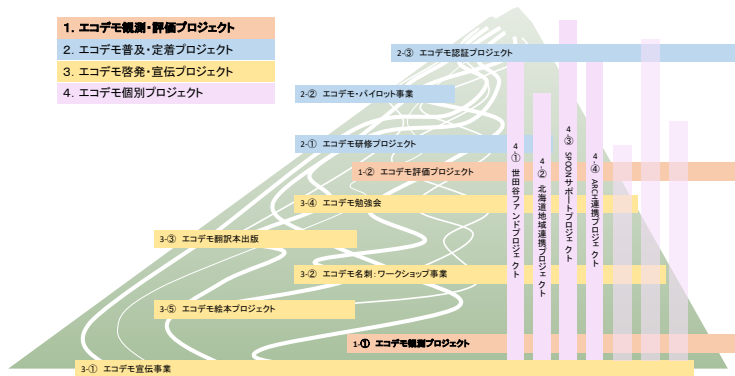


図 68 : エコデモ財団 10 事業のステップ

3. 金沢・能登でエコデモを探す

さて、ここからが、昨日、一昨日のことです。実は僕は、一昨日の能登の方は、東京で入試の業務があってどうしても出られなくて、その代わり 1 カ月程前、萩のさんのところなどにお邪魔したのですが、今回は金沢の方にしか行けませんでした。

今回、用意した道具が、このエコデモ発見シート (図 69) です。非常に単純な形をしていて、項目にそれぞれ「文化多様性」「ランドスケープ」「生物多様性」と書いてあります。文化多様性や生物多様性というのは、もうちょっと砕いて、社会的なことと自然に関することでもいいと思うのですが、エクスカッション先で見えたもの、聞いたことを、ここに分類して書いていきます。

図 69 : エコデモ発見シート

ただその場所に行ってみても、意外と何も見えていません。同じ風景でも、「ここがまきを採る森だよ」「ここが土を採るところだよ」と言われないと分からない。その場で活動されている方にお話を聞いて、エコデモと一緒に発見してもらおうのです。気が付いたことを、どんどん書いていきます。例えば、なにか社会のことに気が付けば書き、見えた風景をランドスケープの欄に記す。そして両者の間には何か関係があるのではないか、さらに社会やランドスケープに対応する自然の事象はないか、探してみるといった具合です。そうすると、「あ、これもそうかも」というふうに新たな発見があったりします。どう考えても思い付かない場合は、実際に何かを付け足せばいいのではないかと考える。そのような思考のための道具です。

今回のエクスカッションでは、能登で 3 カ所、金沢で 3 カ所の住民発の事業や企画を回りました。能登の方は 26 名の方と一緒に回ったそうです。金沢は 18 名。僕は皆さんがエコ

デモ発見シートをそんなに書いてくれないのではないかと思っていたのですが、実際はすごく一生懸命書いてくれまして、そうして情報の詰まった 90 枚のエコデモ発見シートが、今、手元にあります。ところが、今日の発表までにこれをきれいにまとめるのは到底無理でした。まだまだこれから、きちんと読まなければいけないところです。

エコデモの発見は、皆さんの 90 枚を並べてみて、自然と社会とランドスケープを結ぶ回路を見ていきます。そして見つかった回路をもう一度、例えば萩のさんのところでしたら、萩のさんに見ていただいて、「どう思われますか」と聞く。「なるほど、これがエコデモね」と言ってもらって初めてエコデモ発見になるのです。事業を展開している人と一緒に、同時に、その事業の中にエコデモを発見するのが基本です。ですから今日、これからご説明するのは、エコデモ発見の途中の途中です。

これが皆さんに書いてもらった 90 枚のエコデモ発見シートの一部です。シートの中身の細かい点、ひとつひとつの話は、後で丸谷先生のワークショップでご説明してくれます。ここでは 1 カ所だけ、お話してみます。先ほど Juan さんが紹介してくれた、卯辰山の山麓の伝建地区の心蓮社というお寺と庭の話です。そこに僕たちは昨日訪れて、ゆっくりと庭を眺め、美味しいお弁当を頂き、それから皆さんにエコデモシートを書いてもらいました。例えばこの方は、非常にシンプルに書いてくれましたが、こういうものが 10 枚、集まりました。整理してみると、このようになります。このシートは今朝 3 時ぐらいまで掛かってまとめたんですよ！

全部はとても説明できないのですが、例えばこの辺には、Juan さんが、あの庭に行くと縁側に座っていると、何時間でもそこに座ってられる、時が過ぎるのを忘れてずっといられると言っていたと書かれています。庭はやさしく穏やかで、Juan さんと自然との境界となり、自然の入り口になっているのではないかと。庭というランドスケープが入り口になっているのではないかと、この方は書いています。

そうやって考えてみると、昨日の庭は本当に美しい風景で、光が水面に当たって、アメンボが動くときらきら、きらきら水面が動くのです。水面はそんなに動いては見えませんが、リフレクションの光が、石灯籠に当たって、ずっときらきら、きらきら映っています。時間がたつと、今度はタブの木の幹にも映って、きらきら、きらきらする。時が過ぎるのを忘れますよね。恐らくそれは、奇跡のような自然の美しさを見る人が自然と一体となる瞬間であり、庭が自然の入り口であり、同時に自分への入り口でもあるだろうことに気が付きます。まさしく禅の庭の、心蓮社は禅寺ではないですけども、日本庭園の一つの特徴ですが、自分への入り口と自然への入り口が、あそこに開いているというわけです。

これは別の方のエコデモ発見シートですが、Juan さんが光を感じている。Kenneth さんも、Orioli さんも、ずっと見ている。だから、文化の違いを超えて、庭と水面と光の反射

は、自然への入り口になると書かれました。われわれ東京から来た者も、若い学生も、みんな見とれている。そのようなランドスケープがある。そういう意味では、文化の多様性を超えた、自然への合一が、あそこの風景に現れているという発見です。今回参加した方々のエコデモ発見シートをまとめていくと、そのような風景が見えてくるのです。

今回の心蓮社の庭のエコデモ発見では、社会-ランドスケープ-自然の関係ラインは、三つにまとめられました。例えば、浅野川の向こう側になぜお寺がいっぱいあるのか。あるいは、ここのお寺は、平安後期からの歴史があって、前は真言宗で、今はいっぱい仏様の像があるとか。これは見学させてもらいました。あとは、モリアオガエルの卵があったとか、シオカラトンボが飛んでいたとか、そういうことも全部出てきます。

これが、そのお庭です。写真ではよく見えませんが、ここにきらきら、きらきら光っているのです。これは先ほど、Juan さんに聞きましたが、僕たちが訪れる前の日に、住職さんがきれいに掃除をしてくれたそうです。ですからやはり、その人の優しい心がここに映っている。

これは心字池といって、「心」という漢字をかたどっています。自然そのものには心はないのだけれども、人がそこに心を入れることで、自然に文化が入っていきます。そして山の上の方からは常に自然の側が、庭を自然に戻そうとします。藻が生えたり、コケが生えたり、人間から見ると木が大きくなり過ぎたりします。人間の方は、それをメンテナンスすることで、自然の入り口を維持し続けようとしています。Kenneth さんも話していましたが、入り口がここにあります。ですから、自然と人間の文化のせめぎ合いと言ってもいいし、両方も重なっている場所だとも言えると思います。

そういう意味では、ここには素晴らしいエコロジカルなソサエティ、カルチャーとエコロジーの接点があるということなのです。それだけだと、「なるほどね」です。さて Juan さんにお借りした先ほどのスライドです。心蓮社はこの辺です。東山の麓にあって、水が湧き出しています。後ろ側は山の名所で、こちらが町で、しかも浅野川を挟んで寺を置くという、恐らく政治的な力で出来た寺町である。ですが、心蓮社が自然の入り口ならば、ここにいっぱいあるお寺は、すべてそうなのではないか。人が心を開いて、自分と向き合い、自分と合一し、自然と一体化する。この辺り（東山の寺町）全体は、自然がまちに出てきているところで、逆に文化が自然の中へ出ていくところでもあり、一人一人を通して、自然と自分と合一するポテンシャルが発揮される場所ではないかと思っています。

そのように考えると、山の麓のこの場所というのは、心字池のある心蓮社のお庭に匹敵するようなポテンシャルのある場所です。一方、僕たちが見る観光地化された東山ひがし区というのは、とても自然との接点とは思えないし、あるいは社会との接点ともなかなか思えません。この地区を、Juan さんは、グローバルなクライメートチェンジ（気候変動）と結

び付けて考えられたし、それもすごく大事なことだと思います。しかし僕ならば、庭を通して、そこには自然が来ている、われわれ人間のカルチャーが重なっている、そのポテンシャルが非常に高い場所として位置付け直すと思います。

ここを歩いてみると、素晴らしい階段の風景で、お寺に入っていきます。お寺は、開いていないから入ったことはないけれども、そういう素晴らしいところがきっとたくさんあるのでしょう。そして庭々とそこに至るまでの東山地区なども位置付け直してみたらどうだろうと、そういうことを思います。

そのようなことが、エコロジカル・デモクラシー、一晩での考察の結果です。皆さんで発見したものを僕がまとめたものです。しかも全員ではなく、10人分ぐらいをまとめた、まだ途中の途中の報告です。

文化の多様性という意味では、お寺の格天井にいろいろな絵があるのですけれども、これもいろいろな市民の方が描いたそうです。真ん中は九谷の絵付けのすごい人が描いたと聞きました。真ん中には素晴らしいランドスケープとしての庭があります。コケがむしたり、モリアオガエルが来て卵を産んだり、そういうことが繰り返し起こっています。そのような風景が自分への入り口になり、僕たちは自然と合一し、そういう場所だと知るのでしょう。

昨日実は朝5時ぐらいまで、萩のさんのところだったら、どのようにエコデモが見えるかなとか、クリエイティブツアーだったら、どのように見えるかというのをやってみました。後で丸谷先生がご紹介してくれることになっていますので、楽しみにしてください。

4. 生物・文化的多様性とランドスケープ：エコデモ発見シートから

これは、皆さんに書いてもらったエコデモ発見シートです。このようにして見ると、ランドスケープのレイヤーが真ん中であって、エコロジーとカルチャーが両端になります。ランドスケープのところに、例えば金沢のランドスケープを置いてみます。それぞれ社会的なさまざまな多様性があり、エコロジーの多様性も場所から場所によってどんどん変わっていきます。

一般的に生物多様性と言えば、エコデモ発見シートの自然の欄だけの話です。どれほどの生物がこの範囲にいるのか、それから社会・文化の欄をみて、どれだけ多様性があるのか、別々に話してします。丸谷さんの発表は、地形と文化のつながりを話していましたが、あのような話をされる方は珍しいのです。

すべて、金蔵の集落の話も、土蔵の話も、まるやま組の話も自然と文化が一つであり、分けることがもともと考えられない。ですから、生物文化多様性あるいは景観の多様性というのは、ランドスケープを媒介にしたセットとして多様なのです。ある場所の自然と文化のつながり方は別の場所のそれとは違うし、ランドスケープとのつながり方も違うというのが、

僕が思う生物文化多様性です。これは僕だけが言っているのではなくて、石川宣言などは、基本的にこういう考え方に立脚されています。そこは、結構革命的な、画期的なことで、場所に根付かせて、自然と文化を考えてみるということ、これはグローバリズムや、物や情報や人が移動を自由にする社会の中で、どのように社会全体を、世界全体を再構成するのかという大きな問題の一部なのです。

もう一つ、例えば金沢の真ん中でのクリエイティブツーリズムでのエコデモ発見シートに、エコロジーがあまり書かれませんでした。「これは、どうしてだろう。この欄には何もなくていいのかな。いやいや、あるとしたら、何がどのようにありえるだろう」と考えてみることは、すごく実り豊かなことを生み出すはずで、そういうことがエコロジカル・デモクラシーの方法であり思想なのだと、僕は言いたいのです。発見される一つひとつの事象が素晴らしいのだから、どんどん発見しなければいけないし、でももしも自然と文化が連動していなければ、それを直し治す方法を考えるのがエコデモなのです。これを皆でやること、エコロジーと社会の関係をみんなで考える、そんなデモクラシーが実践できるのです。

もう一度ですが、エコロジーとデモクラシーが、両方とも場所に根付くように考えて、組み合わせ、動かして、世界を再構成する活動、方法、価値、思想。それらは、ただ情報を集めてアーカイブするものではなく、もちろん誇りにすべきことであり、誇れるわけですが、それをもっと広げていく。あるいは今とは違う形。いっぱいしゃべりたくなりますが、そろそろやめなければいけませんね。

美しい風景に現れている、美しい社会関係と美しい自然との関係。必ずしも、僕たちには美しく見えないかもしれませんが。まるやまの社会関係は、個人の自由に慣れ親しんだ僕たちから見ると、とても窮屈かもしれません。けれども、それがあの美しいランドスケープを生んでいるとすれば、そこには学ばねばならない「何か」が、あるのです。そういうものを、今回、能登・金沢を見ながら、具体的にみることができました。エコロジカル・デモクラシーは本当にそこら中にありますし、それが持っている可能性を確認できたということです。

自然と社会がここにあって、そこに一人の人間がいて、自然に入り、自分に入る。

これは最後のスライドです。何でもないスライドなのだけれども、ここは鞍月用水といって、もともと蓋が掛かっていたところです。これが開いたというのを聞いて、1カ月前に来たときには、ここにホテルが飛んでいました。この写真は昨日のもので大雨が降った後ですが、この風景の中に、自然と社会と一緒に見てみる。川の蓋を開けるときに、コミュニティはどれほどたくさんの議論を重ねただろう。その面倒くさい議論は、どれだけ人の絆をつくっただろう。ホテルが戻ったことで、どれだけ人々が喜び、自然と一緒にいることで、その人自身が変わっただろう。このようなことを考えてみたいということです。

若干時間が過ぎました。これで僕の発表を終わります。ありがとうございました。

セッション3のまとめ

土肥 真人（東京工業大学 准教授）

先ほど Aida さんのお話を聞いて、僕が思ったことです。障害は社会的な定義であって、ディスクリミネーションなのだというのは、まったくそのとおりですよ。もうちょっとエコデモ的に見ますと、人間だけが、障害者の人や生殖年齢を過ぎた高齢者の人と一緒に住むことを選んできた「種」です。他の動物たちはそういうことをしません。なぜ人類だけが一緒に暮らすのかというと、その方が生存に有利だったからだと思います。子どもを、もう子どもを産まないおじいさん、おばあさんに預けて、お父さん、お母さんは外に餌を探しに行くというのが有利だった。あるいは、障害があり歩けない人を背中におぶって歩いていく大変さよりも、その人が持っている知識の方がはるかに価値があると、昔の人は考えました。これが人類の「種」としての生き残り戦略だとすると、それが人間の自然、人間が持っている共感するという能力になったということです。近代になりこれらの人の内に培われてきた自然は、近代的自我、確立した個人という前提の中で抑圧されていたけれども、それが現代になりもう一度戻っているように、僕には見えるのです。アイーダさんの話はもちろんソーシャルジャスティスの話でもあるのですが、それ以上、人間の本質に触れる話だと思うのです。

それから、農場に現れている風景。障害者の方が、手で虫を捕って、一緒に働いている。その風景は本当に、考えれば考えるほどプライスレスですよ。その畑と、そのブルーベリーを売って、皆が食べるところまでの風景を全部考えてみる。それは美しいのです。ランドスケープに美しく映る社会的な関係があり、生産の方法があるのです。このようなランドスケープを美しいと思い、その理由をしつこく考えてランドスケープという鏡に映った社会を創っていくことが、大事だと思います。美しいし、楽しいしという。それは支え合うことの、人間という種として持っている、自然なのだと思います。

本当は、もっともっとお話したいのですが、ラップアップの時間ですので、ここで終わりにします。ありがとうございました。